〈書　評〉

# 子安宣邦著『本居宣長』（岩波書店・平成四年）

小島康敬

## 一

本書は一貫した方法意識に基づいて著された本居宣長論である。否、ここで展開されているのは、宣長の思想を解釈したり、再構成したりする意味での通常の宣長論ではない。いわば宣長を括弧にくくってしまった上で、宣長によって言い出されたある事柄が、括弧の内側ではなく、その外側にどのような意味を分泌していったかを論じたものである。

認識対象にどのような視点で迫るのか、その接近の方法を不断に自覚化する作業を押し進めながら、子安氏は既に単行本としてだけでも『「事件」としての徂徠学』（一九九〇年）、次いで『鬼神論』（一九九二年）を公刊されてきた。氏の近年の意欲的な仕事ぶりは驚嘆に価する。本書がこれら先行する書に結実した方法意識の上に立脚して書かれたものであることは言うまでもない。

氏の方法意識に関する前提的な理解なくして、本書に接した場合、おそらく読者は戸惑い、ある種のフラストレーションに陥るのではないだろうか。ある種のというのは、例えてみれば、神殿の外回りの拝観は許されても、その中に立ち入ることを固く禁じられた時に抱くようなあのもどかしさである。日本思想史上に聳え立つ宣長はどのような人間で、彼の思想の本質や如何と期待して読み進めていっても、本書からはその答えは一向に返ってこない。宣長の生活の息づかいやその思想形成に至る内面のドラマはどうであったか、本書はこの手の期待をもって対象に立ち向かう者を見事にはぐらかし、裏切る。これは氏の方法意識が意図してしからしむるところのものであろう。宣長の思想の本質やその思想構造、それを本書に求めることは無い物ねだりというものである。

では、氏のその方法意識とはどのようなものか。この問題は後に考えることとして、先ずは本書の全体の構成を知る上で目次を掲げておこう。

序章　なぜ宣長か、なぜ『古事記伝』か
第一章　「始まり」の物語――『古事記伝』への道・一――
第二章　『直毘霊』と「皇国」像の形成――『古事記伝』への道・二――

第三章　美しき「口誦のエクリチュール」――『古事記伝』への道・三――
第四章　天地の「初め」の物語――『古事記伝』の世界・一――
第五章　神をめぐる言説――『古事記伝』の世界・二――
第六章　新たな「神代の再・語り」――『古事記伝』以後――

本書は宣長断罪の書である、と私は見た。氏は文献実証主義的であるとして近代においても学問的に高く評価され続けてきた『古事記伝』のイデオロギー性を露にする。篤胤と違って、物腰穏やかで、文芸の本質が「物のあはれ」にあることを教え、繊細な人情を重んずる人間論を展開し、一生を古語の解明に費やしてきた学者宣長、その宣長こそ実は日本イデオロギーの形成者なのである。実証的な註釈という学問的知のスタイルをとって「日本」を語るが故に、声高に「日本」を叫ぶ篤胤などよりもっと手がこんでいて始末が悪い。宣長が近代においても、戦後においても「再生」するのはこのことと関係しよう。宣長の国粋主義的な面はこれまでもしばしば指摘されてはきた。しかし、それは『古事記伝』という学問的に厳密な輝かしい業績に目を奪われて、そういう面もなくはないが、それは本質的な事ではないという形で免罪されてきた。そうではなく、この『古事記伝』の註釈で語られた言説こそが問題なのである。そこを問題にしなければ、いつまでも宣長は「高い評価を与えられながら生き続け」ることになる。そういったけじめなき宣長の「再生」に止めを刺しておく必要がある。氏の意図を多分に踏み越えた読み方をしたかも知れないが、私は本書から発せられたメッセージとしてこのように受け取った。

目次の構成から一目瞭然のように、本書はあくまでも『古事記伝』にこだわり続けて宣長を論じたものである。これまでの多くの論者が宣長を語ってきたが、「『古事記伝』を中心に人は宣長を論じてきたのだろうか」と氏は疑問を呈する。なぜ『古事記伝』が取り上げられなければならないのか。宣長のライフワークが『古事記伝』であるからというだけでは答えにならない。なぜ『古事記伝』か。それは『古事記伝』が「近世十八世紀後期から十九世紀にかけての思想空間に、大きな『事件』として登場する」（十一頁）からである。『古事記伝』という註釈を通じて何が新たに語り出されていったのか、と同時にまさにそのことによってこれまでの何が隠蔽されていったか、この「事件」性に注視せよ、と氏はいう。では『古事記伝』が有するこの「事件」性とは何か。本書の全体がそれへの解答である。

## 二

以下目次の順に即して、私の理解できた限りにおいて（論理が錯綜し、新書本にしては読解するのに努力を要する）、要約紹介したい。

第一章。ここでは有名な「松阪の一夜」の物語が取り上げられる。宣長が『玉勝間』で回顧するところによれば、真淵は古の心を得るためには先ず古言を明らかにしなければならないと考え、万葉の解明に歳月を費やしたが、『古事記』にまで手がまわらず、宣長に古

事記研究の遺志を託して励ましたという。この師弟間の麗しい学問継承の物語が『古事記伝』を順調に完成しつつある時点の宣長によって、『古事記』註釈の始まりを回顧して方法的に整序されて語られていることに注意を向けよ、と氏は言う。真淵にとって万葉とは「ただ古言を明らかにするための前提となる作業ではなく」、「みずからもそれに習って詠むことで回帰することを願う、心の原郷であった」（二四頁）はずである。とすれば、ここに師の遺志を自分の意図する方向へ強引に引きつけて語る宣長が浮かび上がってこよう。師の遺志を脚色する宣長、穏やかで学問的に誠実なこれまでの宣長像は揺らぎ始めてくる。

第二章では、『古事記伝』が純粋に実証的学問的方法に基づく書というより、イデオロギー的主張をうちに含んだ書であることを、「皇国御国」の自己神聖化の言辞を綴る『直毘霊』を序章としてもつことのうちに明らかにしようとする。『直毘霊』で自国を神聖化して異国を排斥する宣長の言葉が「どれほど品のない、質の悪いものであるか、よくよく見ていただきたい」（四三頁）との子安氏の発言は、氏の宣長に対するスタンスを余すところなく語っている。「『直毘霊』は、『古事記伝』の仕事がかなり進捗してから、「総論」のうちにおさめられたのではない、はじめから『古事記伝』の総論はこの『直毘霊』を含むものとして考えられていた」（三二頁）。このことの意味は極めて重い、と氏は言う。なぜならこのことは、宣長の「古道」論は『古事記』の実証的な註釈という地道な純学問的営為の帰結などではなく、その逆、「古道」論で主張されていることが最初の前提としてあって、それが『古事記』の註釈を領導したことを意味してくるからである。「古言」→「古道」ではなく、「古道」→「古言」とベクトルが逆さまになってくる。とすれば、近代的な学問方法の夜明けを告知するものとも言われる、「古言をしらでは古意をしられず。古意をしらでは、古の道は知りがたかるべし」（『初山踏』）との学問的鉄則とは一体何だったのか。

第三章では宣長における『古事記』発見の意味が追求される。宣長は『古事記』を「上つ代の清らかなる正実」を知る上での「最上の史典」として発見した。なぜ『古事記』を最上の史典としたか。それは「上つ代の実」を漢文でもって記した『書紀』と違って、「さかしら」を加えず口誦のままに記述しているからである。宣長が口誦のままの記述を重んじるのは「皇国の声音のすぐれて正しいこと」を確信するからであるが、それではなぜ、この国の声音言語が正しいのか、その根拠を宣長は見いだし得ない。宣長は「皇国は万国にすぐれているゆえに、この国の声音言語は正しい」と主張するが、これは「正しい国のものゆえ、その言語は正しい」と言っているにすぎず、全くのトートロジーでしかない。宣長を糾弾する氏の言葉は執拗で激しい。

そして更に氏は皇国の言語の正しさを同じく主張しながらも、宣長と篤胤との違いに着目する。篤胤は、わが国の声音は天地自然に通う声音であるが故に正しいとして、皇国言語の正しさの根拠を「天地自然」に求める。宣長にあっては「皇大御国」という大文字の「自己」にその言語の正しさの根拠が帰着し、篤胤にあっては「天地というアルケーとの連関で御国の言語の正しさがいわれる」。「この二つの言説の間の微妙な差異はただ言語観だけにとどまるものではな

い。それは、なぜ宣長が『古事記』というテクストと、テクスト上の記述の解読に執着し、他方なぜ篤胤が『古事記』をも古伝承を残す一つの資料とみなすのかという差異にも連関していく。宣長にあっては、正しさが究極的に帰着する「皇大御国」の、この大文字の「自己」の同一性を認識するにあたって、その「自己」のあり方がもっとも正しく記述されている「古記録」が求められるだろう。だが篤胤にあってはそうではない」（六六頁）。この資質の異なる両者の言語観の相違が『古事記』観の相違に連関していくことへの指摘は説得力がある。『古事記』を所与の神典として絶対視する宣長、『古事記』を相対視する篤胤。狂信的国粋主義者という非難を篤胤ひとりが被ってきた。しかし、宣長はどうか、篤胤以上ではないのかと、氏はそう糾弾しているように思われる。

第四、五章は本書の中心部に相当するものと思われるが、氏の宣長批判は一層白熱を帯びてくる。先ず四章では宣長の「天」（アメ）「命」（ミコト）等の註釈にみられる「イデオロギー性」をあぶりだしていく。宣長は「天地」の「天」を「アメ」と訓んだ。それは天帝天道といった熟語にともなわれる「天（テン）の概念」を排除することを意味している。では「アメ」とは何を意味するのか。宣長は「阿米てふ名の義は、いまだ思ひ得ず」と言う。この宣長の言葉は「恣意的な名義の追求をみずから抑制する学問的な禁欲的態度を示すものとみなされてきた」が、これは「漢意の断乎たる排除の意志を示すものと見たほうがよい」（九四頁）、と氏は註釈作業の前提に先だってある宣長の「意志」を指摘する。

また『古事記』は多くの神話伝承をもって構成された、重層するいくつもの創世神話として見るべきであろうが、宣長は「辻褄合せと見られる」ような解釈をしてまでして、『古事記』を単層の「ひと続きの創世神話」と見る。これは宣長にとって『古事記』は「初め」の物語を人々に啓示する「聖なるテクスト」であらねばならぬからである。

次に第五章では、宣長の「神」を語る言説が他の先行する神道的言説を「排除」していった、その「戦略的な意図」が露にされていく。私の個人的な関心からして、この章を最も興味深く読んだ。宣長は神の語義推定への学問的禁欲の姿勢を思わせるかのように「カミと申す名の義はいまだ思ひ得ず」と言うが、これは「定義の形をとった先行する儒家、神道家による解釈的な言説の恣意性を浮かび上がらせて、批判し、解体しようとする」（一三四頁）ものである。では、宣長は神を語らないのか。そうではない。宣長は「註釈の限界を逸脱するように、饒舌に語っている」（一三九頁）。宣長は神道家の恣意性を批判しながら、氏によれば、産霊の神をめぐる宣長の言説はその実「もはや神道神学的な言説以外の何ものでもない」。問題は神を語る、語り口である。宣長は憶説を排して「神典（『古事記』）のまま」に神を説くというが、これは神をめぐっての他の言説を抑圧し排除することを意味する。「「神典のまま」であることをいう言説は、この意味の読み出しにだけ特権的な位置を与え、他の意味的解釈を〈臆説〉として抑圧しようとする言説でもある」（一六五頁）。

どのような神の言説が排除されたか。例えば「心に神やどる」といった神の言説である。近世の初頭以来の「心の言説」に立脚して、

神は心に宿るという考え方が広く流布していた。しかしこの「心に神やどる」の言説は宣長によって「私見にもとづく神の言説」として「抹殺」されてしまう。「『古事記』にもとづく宣長の神の言説の出現以来、「心に神やどる」といった神道的な神の言説は、臆説のレッテルを貼られることになるのである」（一四九頁）。かくして氏は言う。宣長の『古事記伝』の神の言説は「神典のまま」であるということを正しさの武器として、「近世の神々をめぐる言説空間に、差異の断層を穿つような事件性をもって登場してくるのである。既成の教義を〈臆説〉に貶め、既成の神道を〈私の道〉に逐いやる宣長の神の言説の登場とともに、何が排除され、何が抑圧され、また近代にいたり神の言説がいかに変質されていったかを、私たちは注意深く見る必要がある」（一五四頁）。そして「神典のまま」なる神の言説は、近代的な装いをとりつつ、近代の学者や神道哲学者の神の言説を強く呪縛していることが指摘される。

第六章では、「『古事記伝』以後」の問題として、宣長の『古事記』の新たな語り出しに見られる神の言説が、微妙な差異をともないながらも、いかに篤胤によって継承されていったか、つまり篤胤をいかに深く規定しているかが取り扱われる。宣長の『古事記』発見に導かれた、篤胤の『古事記』再発見の意味の検討がなされる。氏は篤胤の『古史成文』の仕事の意味を次のように分析する。「宣長が『古事記』のテクストからした一筋の天地の初めの物語の読み出しを、篤胤は「古史」というテクストとして具象化しているのである。いってみれば、宣長がする「神典」の再・形象化の作業を、篤胤は「古史」のテクストに受肉化させるのだ。それは宣長の『古事記』註釈が神代の再・形象化、新たなナラティブの語り出しであることに、大きな刺激を受けたものがする神代の「再・語り」創出であった」（二〇七頁）。

## 三

以上、私なりにポイントとなるべき問題を鮮明にしながら要約してきた。率直に言って私にとっては難解で、曲解や誤解の積み重ねによって、氏の意図をねじ曲げたりしてしまったのでないか、と危惧する。また問題をクリヤーカットしようとした余り、氏独特の文体にともなう細かな思考過程の膨らみを損なうような紹介になったかとも思う。

宣長の思想において、その歌論書に見られるような主情的人間観を押し出した側面（初期宣長）と古道論に見られるような自国中心主義を標榜する側面（後期宣長）とがあることは従来から指摘されてきたことである。そしてこの二つの面がどう内的に結合しているのか、その連関の構造の論理を解き明かすべく、少なからざる研究者がこの問題に挑んできた。私もこの「歌から道へ」という宣長の思想の展開と共存の構造はどうなっていたのかに大きな関心を持つ。このような関心をもってこの本に接する者にはいささか満ち足らざるものを感じるであろう。これは氏の方法からして当然のことであり、そのことをあげつらったところで氏にしてみれば先刻承知済みのことであろう。しかしこの種の飽きたらなさは氏の方法論そのものに根ざすところからくる問題であり、私にとって避けて通ることが出来ない。本書を宣長研究そのものとして捉えるのではなく、

宣長を素材として氏の新たな学知の方法が提示された書として理解すると、本書は議論を挑発する大変刺激的で魅力的なものとなる。

氏が近年提示する斬新な方法意識は『「事件」としての徂徠学』の序論部に集約的に述べられている。ここで氏は従来までの思想史において多くとられてきたアプローチの仕方として、二つを抽出しこれらを厳しく排斥する。そのうちの一つは対象への内在的理解ともいうべきアプローチ方法である。これは思想をあるまとまった実体として捉え、思想を構成する諸概念の意味を確定し、それら諸概念相互間の内的な意味連関を見いだし、解き明かすことをもって、思想主体を理解しようとする立場である。こういった「思想史的解説家」の立場を代表する仕事として氏が念頭に置いているのは吉川幸次郎氏の「仁斎学案」「徂徠学案」であろう。

他の一つは「ある物語を構成し、その展開の筋道にその言説を位置づけることで、その言説の意味をとらえたとする立場」(『「事件」としての徂徠学』十三頁)である。つまり露骨な言い方をすれば、研究者があらかじめ構想する歴史のストーリーの内に都合よく収め取る形で対象を解釈する立場である。この例として丸山真男氏の『日本政治思想史研究』が批判の俎上にあげられる。氏によれば、丸山氏の徂徠解釈は、「自然から作為へ」という「近代」の要請する「物語の筋道」に徂徠の言説を絡めとって再構成したものにすぎない。丸山氏が捉えた徂徠の公・私観、絶対者的聖人観等々、それらはテクストの誤読から帰結されたものというよりは、作為的秩序観の形成という「近代」へのストーリーを前提として、そこから演繹して徂徠を読み込んだ「恣意的」解釈に他ならない。そして厄介なことに「このあまりにできすぎた物語によって描き出された徂徠像は、私たちの近世思想への視線を遮るように立ちはだかっている」(同右十四頁)と氏は言う。

吉川・丸山両氏の徂徠解釈の不十分さなり誤謬なりを徂徠のテキストに即して個々に指弾することを越えて、そのよってきたる方法そのものに遡ってする氏の批判は苛烈である。その批判が当を得たものであるか否かは議論の分かれるところであろうが、今この問題に立ち入る余裕はない。

従来の思想史のアプローチに異議を申し立てて、氏が提示するのは、徂徠なら「徂徠の発言が十八世紀の思想空間においてもつ事件性を明らかにしようとする」(九頁)ことである。ある言説が知的世界に「事件として」大きな衝撃を与え、波紋を投げかけたとすれば、そのことの意味を追求していこうというのである。氏は言う。「私が明らかにしようとするのは、この言い出されたことが徂徠という内部においてもつ意味ではない。言い出されたことが外部において、たとえば他の言説との関係においてもつ意味である」(十三頁)。これは主体とテクストとの関係を切り離して、テクストとテクストとの関係性にのみ意味を見いだしていくことに等しい。思想主体の内実に立ち入ることの明確な拒否の姿勢である。

従って本書でも宣長の神概念の内実はどうであったか、あるいは宣長の思想の展開・構造はどうなっていたかといった問題に立ち入ることは意識的に厳しく避けられているのである。しかし、認識対象への共感・反発などを含めた内在的な理解を括弧にくくった形で思想史を構想することが果たして可能なのだろうか。私などは池に

投げ込まれた石が引き起こす様々な波紋を読み解くにしても、その当の石がどんな石であったかに先に関心が向いてしまう。

思想の実体に踏み込まないで、思想をファンクショナルなものと見て、それが「思想空間」に投げかけた「事件」性に着目するいう氏のアプローチは、確かにこれまで見落とされてきた視点であり、充分に魅力的である。しかしそれでは、「事件」と呼ぶに値しないような思想的事象に対してはどのようにアプローチするのか。「事件」足り得ないものは、対象足り得ないのか。その時代においては無視され続け、近代においてその思想的事件性が発見された安藤昌益などはどう扱ったらよいのか。一体「事件」とは何なのか、「事件」と認定し、「事件」性を見いだす主体は誰なのか。私なのか、私達なのか、その時代の人達なのか、そのいずれもなのか。誰にとって「事件」なのか。「事件」の定義は?。的外れの愚問と言われることを承知で尋ねたい事ども である。

それにしても何故、氏は思想主体の内側に立ち入ることを峻拒して、このような方法をとられるのか。思想主体の内実への関与は、いずれ対象との悪しき固着の関係を生みだし、対象とのクールな距離をとり得なくなり、そのことの結果が引き起こす様々な陥穽を警戒されてのことであろうか、斯界の先頭に立ってこれまでの思想史研究とはスタイルを異にする新しい波を巻き起こしておられる氏にその隠れた動機を伺いたく思う。

（国際基督教大学準教授）